

L・H・パーミエ著

『ジャワにおける社会的地位』

L. H. Palmier, *Social Status and Power in Java*, London School of Economics, Monographs on Social Anthropology No. 20, London University Athlone Press, 1960, viii+171 ps.

I

戦後に至って、インドネシア社会の社会学的研究の主体は、オランダからアメリカに移行し、研究方法に関しても従来のインドネシア社会を歴史的・法制的に理解しようとする方法から、社会人類学的方法を用いて、一地域社会の全社会過程に関してデータを収集し、ここに働いている諸因子間の相互関係を明らかにしようとするケース・スタディに重点が移行した感がある(注1)。もちろん、アメリカのインドネシア研究は、従来のオランダ人による研究成果の蓄積の上に立って(たとえばコーネル大学にはオランダ語の文献を翻訳するプロジェクトがある)行なわれているものである。また戦後におけるインドネシア社会の急激な社会変動は、既存の歴史的・法制的な観察では十分にとらえられなくなってきたので、もっと基礎的な構造変化についての多角的な社会的アプローチが要求されるようになり、アメリカはもちろん、インドネシア国内、オランダ、イギリス等の研究者による研究成果が最近あいついで発表されている。

ここに紹介するパーミエの論文も、ケース・スタディの方法に基づいて、1951~53年の2カ年にわたって著者が中部ジャワの2都市において行なった調査の成果で、中心課題であるジャワ貴族の地位と権力の相関関係が、かれらの具体的生活過程の中でいきいきと分析されている。

(注1) この種の研究で最近単行本として出版された論文に、つぎのようなものがある。

- (1) Clifford Geertz, *Religion of Java*, The Free Press of Glencoe, New York, 1961.
- (2) —, *The Social Context of Economic Change*, MIT, 1956.
- (3) Hildred Geertz, *The Javanese Family*, Free Press of Glencoe, New York, 1962.
- (4) Slice G. Dewey, *Peasant Marketing in Java*.
- (5) Robert R. Jay, *Religion and Politics in Rural Central Java*, Cultural Report Series No. 20, Southeast Asia Studies, Yale University, 1963.

(6) Selo Soemardjan, *Social Changes in Jogjakarta*, Cornell Univ. Press, New York, 1962.

II

本書の構成はつぎのようになっている。

第1章—インドネシアの概況、第2章—地位体系、第3章—目的と方法、第4章—ある小都市の社会的特性、第5章—ジャワの Regent、第6章—ジャワ貴族の地位と血縁関係、第7章—Regentとその妻たち、第8章—母方の地位ないし血縁関係と官職、第9章—貧困と名誉、第10章—貴族と官吏、第11章—ジャワ人と華僑の関係、第12章—臨時地方国民議会、第13章—官吏間の非公式の交際、第14章—地位の一般的承認、第15章—権力の譲渡(Transmission of Power)。

以上の各章の叙述の展開はつぎのように要約できる。まず著者は地位と権力に関する理論的枠組みを設定し、インドネシアの地方地域社会の四つの指導者層(インドネシア土着の貴族、ウラマー、官吏と華僑社会での指導者)のうち、とくにジャワ貴族に焦点をしばりながら、戦前植民地官僚として持っていた権力を独立後失ったかれらが、どのように権力の回復をはかったか、またその過程で他の指導者集団との間にいかなる関係を生じているかを分析しようとする。この調査のために、比較的社会的変動が緩慢な都市と、より急激に変化する都市を対象地域に選んだ。そして著者が想定する旧地位体系がいかに変容しつつあるかを観察して、地位体系の変化に関する一般的傾向をとらえようとするものである。

本書の内容的構成は著者の問題関心に従ってつぎのように分類できる。

1. 第1章~第4章—著者の想定する権力と地位に関する理論的枠組みに従って、戦後におけるジャワの四つの指導者層の地位と権力をいかに相関的に位置づけていくかという問題関心と方法の結びつきが述べられる。

2. 第5章~第11章—この部分は人口8000人の都市における調査の成果で、著者が設定する4指導者層のうち、ジャワ貴族に焦点をしばって、その地位と権力が分析されるが、さらに内容はつぎの三つに分類して考えることができる。(1) 第5章~第8章—ここでは主として、「戦後、植民地官僚としての地位を失っても、貴族は過去の権力を維持しようとするが、その場合にかれらの社会組織(特に婚姻制度)がいかなる役割を果たしているか」(p. 18)を統計的基礎に基づいて検討している。(2) 第9章—ここでは「政治的・経済的にかれら〔貴

族たち)にとって不利な現在の環境の中で、高い地位を保持するために、かれらがいかなる努力をはらっているか」(p. 18)の問題が調査されて、実例が示されている。

(3) 第10章～第11章——ここではジャワ貴族を中核とした各指導者間に新しく生まれてきた交際の事情が調査される。

3. 第12章～第13章——この2章において、調査は焦点がそれまでの地方小都市から人口8万人の中都市に移り、そこでの地方国民議会と官吏間の交際が調査される。

4. 第14章～第15章——以上の観察をジャワ社会全体に押し広げてみて、西ヨーロッパ的シンボルが指導者の資格または要件としてますます普遍化することによって、地位と権力との相関関係が変容するという一般的傾向について述べている。

III

以下では上の分類に従って、内容の要点を紹介することにしたい。

1. (第1章～第4章) 著者によれば、地位とは「個人の法的潜在能力つまり法的権利と義務を遂行する力の総計である」(p. 10)。この地位はさらに二つの下位概念——階層的地位 (Class Status) と社会的地位 (Social Status)——に分かれる。階層的地位とは生産機構の中である所得階層に位置づけられた地位、つまり「有効需要」の大小で決定されるものであり、社会的地位とは消費生活における生活様式、あるいは消費パターンにおけるある地位をさしている。普通これら二つの地位体系における位置は、相対応するものと考えられるが、ある社会状況においてはこの対応関係が破壊される場合がある。そしてこの場合にはかならず二つの地位の平衡化への動きが生ずると著者は想定する。この平衡化を実現させるものは権力であり、権力とは「個人あるいは集団がその目的を達成する能力」(p. 10)である。著者はこの仮定をインドネシアの地域社会に適用して、四つの指導者層(特にジャワ貴族に分析をしぼりながら)を区分し、その権力と二つの地位との相互関係をとらえようとするのである。

2.の(1) [第5章～第8章] 著者が本論で述べる貴族とは、古くヒンズー・ジャワ王国の王族の血統を引くと信じられている人々で、植民地時代に「郡 (Kepatihan) 以上の行政地域の長官であった者のみ」をさしている。すなわち血統の正当性のみでは、貴族の仲間入りはできないのである。たとえば貴族の血は引いても、政府機構

から離れて、商人などになったものは Partiklir (非官吏) と呼ばれて、貴族社会には参加できないのである。このように貴族の範囲を限定したうえで、威信の低下の防止に貢献したものとして、著者は婚姻制度を考察する。貴族層は正妻のほかには何人かの妾を持つのが通例であったが、正妻には同地位の家柄の女性を「公務上の配偶者」として娶る例が多く、両家の交際は家族ぐるみで行なわれ、貴族としての交際がはかられたのである。一方、第2夫人以下は通常下位の地位にある家から配偶者が選択され、配偶者間の個人的関係を出て家と家との結びつきに発展することはなかった。以上は婚姻制度に関する分析の中から一例を紹介したのみであるが、この個所における著者の分析は非常に詳細で説得的である。

2.の(2) [第9章] 戦後に貴族は植民地官僚としての権力をはく奪されるが、かれらにとって深刻な打撃は経済力の喪失であった。なぜなら社会変動はかれらに伍すべき新指導者を誕生させたが、地位の点では依然として貴族が頂点に位置する存在であったから、かれらは経済力の低下にもかかわらず、社会的地位を保持するために、多額の出費を余儀なくされたのである。著者はここで Batik 織物業を営む1貴族婦人の場合を詳細に観察する。

Batik 織物はジャワ固有の伝統的衣装のための織物であるが、かの女が生産するのは高級品に限られる。したがって顧客は、一般の民衆ではなく、貴族その他の上層階級のみで、高い社会的地位のシンボルとして必要な製品なのである。かの女が貴族であることは上のような顧客の獲得に非常に役立っている。またかの女の威信のゆえに企業資金の借入も容易になる。これは信用の問題のほかに、貴族との接触が資金提供者にも利点をもたらすことによるのである。このようにして地位は権力(この場合には「経済的パワー」)を招来するのである。

しかし、その権力には限界があると著者は考える。なぜなら、かの女の Batik 生産は良質のものに限られているからである。もし、大量に安価な Batik を(国内向けに——評者)生産するならば、それはかの女の地位に悪影響をもたらすのである。

2.の(3) [第10章～第11章] ここではまず指導者の指導力の問題が扱われる。一般に権力の基礎は、大衆に対する有効なシンボル操作に依存するが、4指導者層(貴族、地方官吏、ウラマー、華僑社会での指導者)のうち回教徒指導者 (Ulama) はインドネシアのはほぼ全土をおおう回教徒に共通に訴えるシンボルを操作することができる。ただその指導力は宗教的分野に限定されている。貴

族はイスラム文化よりはジャワ文化に対する愛着が深い点で、その指導力に地域的限界がある。地方官吏は地位ヒエラルキーの中で高い地位を有するにもかかわらず、その西欧的志向性の強度のゆえに、現住民から離反している。これらの集団のうち、貴族と地方官吏の交際を、著者は公式的および非公式的交際の2面から考察する。公式的交際というのは当時この都市に設置された二つの委員会(一つはこの都市に駐屯した軍隊の告別パーティ、一つはマホメットの昇天祭の貧者への慈善行事を計画する各委員会)における委員間の職務上の交流である。この公式的交際は非公式的交際にまで発展する。たとえば貴族の結婚式、ある初等師範学校長の息子の割礼式等において両者は接触する。そして著者は、これら2集団間の関係を対立的であるよりは、概して友好的だと判断し、その原因を教育水準の共通性、生活様式の共通性等に求めている。

最後に上記3者とは異なる指導者である華僑社会の指導者が考察される。華僑社会とジャワ人社会は、おのおの異なる地系位体の存在する社会であって、おのおのの帰属社会集団から離れて他と交流することは、その帰属集団内における地位の低下を意味していた。ところが、戦後にいたって、両社会の指導者間の交際が帰属集団内での地位の上昇をもたらす要因の発生をみた。たとえば、貴族 Baik 業者の場合には、その染色過程でかならず華僑の協力を必要としたし、また西欧的生活様式を維持しようとする官吏は、華僑から受けた経済的恩恵の代償に商業許可書や特権をかれらに返礼として与えた。

3. [第12章～第13章] 人口8万人のこの都市には戦後 Regency (県), Residency (州) の首府として、前述の人口8000人の都市に比較して、より急激な社会変動がみられ、前者の都市には存在しない新指導層(地方国民議会議員と数多くの官吏)の出現である。

著者はまず議員の党派別構成を調べた結果、イスラム政党が圧倒的多数で、その社会的地位はあまり高くはなく、総じて若年者が多いことを指摘している。また貴族の称号を有するものは、わずかに行政長官とその書記のみであった。つぎに著者は官吏間の私的な交際関係を調べた結果、その交際が同僚ないし同職業の者に限られていて、官吏間に集団としての仲間意識がまだ未発達な点を指摘している。

4. [第14章～第15章] ここでは、地位と権力の変容の一般的傾向が述べられる。まず著者は、指導者の形式的な地位が承認されあう場である種々の集会(国民的祝

日、宗教的儀式、党大会)に注目して、指導者を三つに分類する。(1)国家的レベルの地位集団、(2)部分的宗教的地位集団、(3)部分的世俗的地位集団。これらの集団は従来おのおの独自のシンボル操作によって、各自の地位を維持してきたのである。ところがインドネシア社会と近代社会との接触が密接になるにつれて、西欧的価値観が普遍化してきた。したがって社会的地位の高さも西欧的価値基準に基づいて決定されるようになりはじめ、「地位の標識」としての象徴が同質化する傾向が生じてきつつあると著者は考える。また、この同質化の速度は、教育の普及によって早められ、権力が従来のごとく少数者にのみ独占されることはなくなってきつつある。著者はこの現象を、「権力の譲渡」(Transmission of Power)を促進する過程であると考え。つまりこの場合に著者が考えている権力とは、出生と結びついたかぎりの個人の能力に非常に近いものとなり、したがって従来少数の指導者層に独占されてきたシンボルが教育の普及によって多数の者に移行し、無意味になることは、「権力の譲渡」と考えられるのである。

IV

本書の表題は「ジャワにおける……」となっているけれども、内容によって明らかなように、本書は地方都市における社会的威信の研究である。したがって、ジャカルタのごとく権力エリートを頂点として権力構造が形成される大都市や、土地の所有関係と密接に結びついて政治・経済構造が形成される村落社会を考慮に入れると、当然地方都市とは異なる価値基準で社会的威信が決定される社会が存在することが予測される。

ところでこのような地方都市における社会的威信の研究が全インドネシアの国民社会のレベルでその社会構造・政治構造との関係でいかなる有効性と妥当性を持ちうるであろうか。この研究は地方的範囲内でのみ有効な社会的威信を持つにすぎない指導者層の分析をもって、ただちに全ジャワ的なものに置きかえているのである。これら地方的指導者をいかに集積してみたところで、国家的な指導者層の全体像を理解することにはなりえないのではないか。

層を全国的権力構造の中で位置づけようとすることには向けられていない。

(アジア経済研究所調査研究部第2調査室 松尾 大)